

# 教育委員会会議録

令和3年(2021年)6月定例教育委員会会議

開 会 日	令和3年(2021年)6月24日(木)		
開 会 時 間	午後2時00分 ~ 5時00分		
開 会 場 所	教育センター 4階 大研修室		
出 席 者	委員 会	遠藤洋路 教育長 泉薫子 委員 出川聖尚子 委員 小屋松徹彦 委員 西山忠男 委員 苫野一徳 委員	
	事務 局	松島孝司 教育次長 森江一史 教育次長兼学校教育部長 中村順浩 教育総 務部長 他	
提 出 議 案	<p>議第48号 市立高等学校・専門学校改革基本計画(案)について</p> <p>議第49号 熊本市放課後子ども総合プラン運営推進委員会委員の委嘱について</p> <p>議第50号 熊本市立野外教育施設運営協議会委員の委嘱について</p> <p>議第51号 令和4年度(2022年度)熊本市立高等学校入学者選抜の基本方針 の制定について</p> <p>議第52号 令和4年度(2022年度)熊本市立平成さくら支援学校入学者選抜 の基本方針の制定 について</p> <p>議第53号 熊本市文化財保護委員会委員の委嘱について</p>		
報 告	<p>(1)「(第1期)学校改革!教員の時間創造プログラム」における実績報告及び今 後の取組について</p> <p>(2)令和3年度(2021年度)実施 熊本市立学校教員採用選考試験の志願状 況について</p> <p>(3)令和3年度(2021年度)実施 熊本市立学校管理職等採用選考試験につ いて</p>		
自 由 討 議	(1)特別支援教育の現状と課題—平成さくら支援学校開設から5年目、あおば支援学校 開設から2年目を迎えて—		
署 名	泉 薫 子		
	出 川 聖 尚 子		
会議録作成者	教育政策課 木村三恵		

<p>〔開会の宣告〕 遠藤洋路 教育長</p> <p>〔会議の成立〕 遠藤洋路 教育長</p>	<p>令和3年6月定例教育委員会会議を開会いたします。</p> <p>本日は、私の他5人の委員が出席しておりますので、この会議は成立しております。</p> <p>会議録署名人は、泉委員と出川委員とします。</p>
<p>日程第1 前回来議録承認</p> <p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>5月27日開催の令和3年5月定例教育委員会会議録を各委員のお手元に配布しております。この会議録等を承認することに、ご異議はありませんか。</p> <p>(異議なしの声)</p> <p>異議なしと認め、前回来議録を承認することに決定します。</p>
<p>日程第2 事務局報告</p> <p>(1) 事業・行事等報告について</p> <p>○ 前回定例会議(R3.5.27)以降の事業・行事報告</p> <p>○ 今後の予定</p>	
<p>日程第3 議事</p> <p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>それでは、「日程第3 議事」に入ります。議事の都合により、議第53号を先に審議します。</p> <p>・議第53号 熊本市文化財保護委員会委員の委嘱について</p> <p>《北野伊織 文化財課長 提出理由説明》</p> <p>西山忠男 委員</p> <p>この委員会は天然記念物の指定なども所掌するのでしょうか。</p> <p>北野伊織 文化財課長</p> <p>天然記念物等も所掌するということになります。</p> <p>遠藤洋路 教育長</p> <p>他にご意見、ご質問ありますか。</p>

<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>では、ないようでしたら採決を行います。 議第53号 熊本市文化財保護委員会委員の委嘱についてご承認いただくことにご異議ございませんでしょうか。</p> <p>(異議なしの声)</p> <p>ご異議なしと認めます。 議第53号については原案のとおり決定いたします。</p>
<p>[採決]           【原案どおり承認された】</p>	
<p>・議第48号 市立高等学校・専門学校改革基本計画（案）について</p> <p>《松永直樹 学校改革推進課長 提出理由説明》</p>	
<p>西山忠男 委員</p>	<p>必由館高校についてお尋ねいたしますが、同窓会から反対があった主要な点は中高一貫という点だと思いますけれども、11ページの同窓会の陳情の文章を読みますと、先行して実施している八代高校、宇土高校、玉名高校、これは県ですけれども、この事例でも分かるように、高校の活性化には繋がっていないとは明らかであるとして書いてあります。これはこのご指摘のとおりなんですか。</p>
<p>松永直樹 学校改革推進課長</p>	<p>確かに設置当初の生徒の応募者数等を考えますと、そのようなことも考えられるかもしれませんが、実際いろいろお聞きいたしますと、英語に関する取組をさらに進めておられたり、中学生、高校生の交流について様々な取組を進めていらっしゃると思いますので、決して実態としてそういった状況にはないというふうに考えております。郡部の高校におきましては、大変人口が減少し、本市内よりも少ない状況でありますとか、郡部の学校からは本市のほうに生徒が多数流入しているといった状況の中、大変奮闘されているというふうに私どもは理解しています。</p>
<p>西山忠男 委員</p>	<p>もしそういうことであれば、そういう実態を丁寧にご説明して、中高一貫のメリットをもう少しご理解いただけるように努</p>

	<p>力した方がいいんじゃないかなと。現段階で中高一貫を諦めるのはもったいないような気がするんですよね。ですから、話し合いによって理解が得られる方向に、できるだけこういうメリットがあるんですよ。先行事例でもこういうふうにおっしゃっていますけれども、実態はこうですよという丁寧な説明というのが必要じゃないかなと思いますけれども、いかがでしょうか。</p>
松永直樹 学校改革推進課長	<p>ご指摘のとおり、丁寧な現状のご説明というのは非常に重要かと思えます。現に市外の学校については様々なご質問をいただいているところがございますので、我々も各学校の現場、当然同窓会の視点と同様に、直接的にお会いをさせていただく中で、こういった学校の取組でありますとか、実際出てきている成果、そういったもののご説明をしていきたいと思えます。また、本市内におきましても幼小連携ですとか小中連携の異なる学校種間での交流で、様々な成果が出ております。そういったものも併せてご紹介をしていくことで、中高連携というものが素晴らしいものになるよう取り組んでまいりたいというふうには考えておりますし、またさらに高大連携等も改革の方向性としては考えておりますので、そういった様々な取組についてご説明をしてご理解をいただいてまいりたいというふうに考えております。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>他にご意見はありますか。</p>
菅野一徳 委員	<p>こちらの必由館のみ異議があったという理解でよろしいですか。今の現状として、先ほどの説明にもあったように、私たちの認識としては可能な限り十分に、生徒だったり保護者だったり同窓会等と対話の機会を設けてきた、意見を吸い上げてみんなと一緒につくっていくという、この機会はかなり意識的にやってきたと思うんですけども。ただ、改革検討委員会でも何度もそのような話になったようにトップダウンでやるというよりはちゃんと市民の声を聞いて、みんなでつくっていく。この学校の主体が生徒であるということも今回の改革の目玉の1つですので、しっかりと市民で作り合っていくんだという姿勢は、必ずそこは貫かなきゃいけないと思うので、今後もこういった声は丁寧に聞いて一緒につくっていくという、単に陳情というよりは一緒につくっていくと、こういう姿勢が私は大事だと思っているので、こういうご意見いただけるのはとてもあり</p>

松永直樹 学校改革推進  
課長

がたいことだと思うので、ぜひこれからも一緒に対話を通して学校づくりをやっていきたいと思うんですけども。今の現段階でそのようなコミュニケーションはどれくらい進んでいるのでしょうか。今、陳情を受けた段階かどうか、その次にもう既に何かコミュニケーションしているのかどうか、少し伺いたいのですが。

ご指摘のとおり、我々は改革の大きな理念としまして、生徒が学校づくりに参画する学校というものを掲げております。そういった意味から申し上げますと、必由館高校生徒が卒業後の学校のあり方について主体的に考え行動し、その他の生徒を巻き込みながら原案づくりを図ってきたことは非常に意義深いというふうに考えておりますし、私たちも必由館高校の生徒には既に2回ほどお会いさせていただいておりますが、お会いするたびに、その都度そういったことで、まさに我々が目指す高校生像を体現しているということを繰り返しお伝えしております。また、併せまして、ぜひ今後も学校づくりに私たちと一緒に取り組んでほしいということでご説明をされていて、その点についてはご了解をいただいております。生徒も既に自分はどうしたいというような要望といたしますか、意見を持っておりますので、それもぜひお示しをいただけたらということでお伝えをしているような状況でございます。

また併せまして、同窓会につきましては必由館高校に関しましては二度ほど既にお会いをしているところでございます。同窓会の方々のご意見といたしましては、大きな部分で言えば中高一貫に反対をされるということ。また、少人数学級につきましてもやはり生徒数の減少があるということで、なかなか賛同が難しいといったご意見もいただいております。一方で、やはり同窓会におきましても、様々なお立場から様々なご意見があるようでして、こちらにつきましても今後、私たちも直接的に学校を交えて意見交換等を行っていきたいというようなことでお伝えをしております、今後継続的に協議を行っていくことについてはご了承いただいております。

苦野一徳 委員

建設的な対応が続いているということで、それは本当に良かったなと思います。こちらの今後の対応についてのところなんですけれども、7月を目処に対案を作成する予定というのは、必由館の生徒たちや同窓会、みんなでの改革案に対しての対

松永直樹 学校改革推進課長	案を出しますよとおっしゃっているということなんですよね。その対案は一緒につくるというよりは生徒のほうでつくって持ってこられて、そのうえで協議して、まとめ直して議決に持っていくという、そういう理解でよろしいでしょうか。
松永直樹 学校改革推進課長	今、現時点での状況でございますので、若干変わり得る部分もあるかと思いますが、教職員の方、校長先生を中心に対案と申しますか、改革案のほうを改めて学校内でもまとめています。一方、生徒は自分たちの思いを踏まえた案というものをまとめる作業をされておりますので、それぞれの意見をまずは7月中にお見せになられて協議をしていくというようなことだと思います。一方同窓会におきましては、まずは学校の考える改革案を見たいということでおっしゃっておられますので、多様なご意見が出た後に、同窓会の意見を考えていきたいというような方針でございました。
苫野一徳 委員	ありがとうございます。このような声上がる、特に生徒たちから上がるということは本当に好ましいことだと、むしろ本当に拍手したいぐらいのことだと思いますので、よく言ってくださったなと思っています。 そうすると、スケジュール感は後になっていく感じでしょうか。
松永直樹 学校改革推進課長	スケジュール感に関する部分につきましては、やり直すようなかたちではございますが、我々事務局といたしましては、引き続き令和5年4月を見据えた内部での検討は進めてまいりたいというふうに考えております。一方、当然これからの協議の状況によりましては、様々な大きな修正も含めまして出てくるかと思いますが、協議がいつ整うか、また教育委員会会議にどの時点でお諮りをいただくことが可能かというのも未定の部分がございますので、令和5年4月ありきと、そういった状況にはないことで今、考えているところでございます。
遠藤洋路 教育長	他にご意見ありますか。
西山忠男 委員	千原台と総合ビジネス専門学校に関しては、学校側からは特に反対は出ていないと理解してよろしいですか。

<p>松永直樹 学校改革推進 課長</p>	<p>千原台高等学校、総合ビジネス専門学校におきましては、大きな改革の理念でございますとか意義、方向性については共有をさせていただいております。ですので、令和5年4月開校に向け、関係の方全て同じ方向を向いて今、取り組んでいるような状況でございます。ただ一方で、我々がお示しをしている案についてご意見を頂戴する中で、大変厳しいご意見もいただいているような状況でございますが、併せてそういった点につきましては対案と申しますか、改善案あたりを各学校で先生方の協議のうえ、お示しをさせていただいております。そういったものについては、非常に練られているようなものでございまして、私たちとしましても、そういったご意見は取り入れたかたちで今、計画を進めている状況でございます。</p> <p>一方、ビジネス専門学校におきましても同様なんですけれども、こちらにおきましても既に様々な改革について生徒もお入りになるようなかたちで検討されていらっしゃるということでございますので、こちらにつきましても既に実施の取組も多々ございますけれども、方向性については同じ方向性でお進めいただいておりますし、特に同窓会からはかなり有用なといえますか、参考になるようなご意見も頂戴しておりますので、そういったものについて我々としては十分に踏まえて進めていきたいというふうに考えております。</p>
<p>西山忠男 委員</p>	<p>教育内容としては、これまでとあまり大きくは変わらない。ビジネス関係とスポーツ関係ですね、千原台は。ですから、そういった反対は少ないかと思うんですけれども。大きな特徴は千原台に通信制を設けること。それからビジネス専門学校は昼夜開校制にすることですけれども、この2点についてはどうのご意見なんですか。どういう受け止め方なんですか。</p>
<p>松永直樹 学校改革推進 課長</p>	<p>ご指摘の2点につきましては、確かに変革としては大きな部分がございます。また、我々が事前に詰めないといけない部分も多々ございまして、今、学校現場から出たご質問に対してお答えをする、若しくは質問に対して調査をするといった状況でございます。今、現実的な検討として様々ご意見をいただいている、例えば入試のあり方とか、生徒を募集するに際しての大きな変革の部分、そういったものも非常に大きなところでございますし、今まである学校との違いを生み出すといえますか、さらにより良いものにするにはどういったものが必要かといっ</p>

	<p>た、そもそも教育内容そのものに対しても確かに外見上はそう大きな変革ではないんですけれども、実際中身を検討していく際においては非常にやはりこれまでと違った取組となり得ることがございまして、その点につきましても様々のご意見をいただいている。どちらかという、そちらのほうが今、ご意見としては非常に多くいただいているという状況でございます。</p>
西山忠男 委員	<p>通信制にしましても昼夜開校制にしましても、かなり人手を要することなので、現在の人員でやれるかどうかというのは慎重に検討しないといけないと思いますし、足りなければ人の手当てをするぐらいの覚悟がないとできないことじゃないかなと思いますので、そのあたりも目配りしてよろしくをお願いします。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>他にはよろしいですか。 今回は千原台と総合ビジネス専門学校の改革案について決定するという原案になっています。ですから校長も来ている。校長から何かありますか、千原台高校。</p>
南弘一 千原台高等学校 校長	<p>今、松永課長からご説明ありましたとおり、本校でもいただいた案を基にしまして教職員、それから同総会、生徒会、全てのものについてご説明をいただきました。職員とも本音の議論をしないと意味がないと思いますので、本音で申し上げますと、全職員が諸手を挙げて賛成というわけではございません。それはなぜかと申しますと、やはり我々教職員の良くないところかもしれないかもしれませんが、変化を求められるというのは非常に苦痛を伴うこともございます。今まで自分たちはこういうことでやってきたというものもございまして、そういった意見も当然教職員の方もございますし、またOBの中にも、本校は前身が市立商業高校でございます。市立商業高校を卒業したというOBの方もたくさんいらっしゃいますので、その商業の流れは絶対に死守してほしいという強い思いも受けました。そのあたりについては、私どもからも検討委員会のほうで強く訴えまして、情報ビジネスコースのほうを一時、工業系の情報というふうな案もございましたけれども、いやいや現実に熊本の今の経済界を考えたときに、地元の経済界で末永く活躍をしてもらう、あるいは現状、即戦力として活用をしてもらうためには商業系のビジネスをお願いしたいということを強く訴えまして、そういった方向性になってきているということは納得をいただいて</p>



いるところです。

あと生徒の参画ということですが、「総合的な探究の時間」については、現状、今、いろいろなテーマを生徒たちが設けて、以前もここでお伝えさせていただきましたが、例えば「千原桜を世界の観光資源にするチーム」とか、あるいは「西区のフェスティバルを盛り上げるチーム」とか、そういったチームを編成しまして、いろんなプロジェクトを現在進めております。

今後また改革の目玉となるようなものをということで、学校改革推進課のほうからもご要望がございましたので、こういったことをさらに発展させていくためには、発展させてどんなことをやりたいかと。それから、そういったことをやっていくためにはどのような、例えばIT機器とか、そういったものが必要になるかということ、最初は各部活動の担当者や体育科、それから情報科の職員、各学年などでブレインストーミングあたりをしようと思いましたが、なかなか時間の確保が難しかったです。今いただいているChromebookのGoogle Classroomを使って全職員、全生徒に総合的な取組の授業、商業の課題研究、それから部活動、体育の授業、そういったことでもっと自分たちはこんなことをしたい、こんなアイデアがあるということを制限なく実現不可能なものと思うものでもいいので出してくれというふうに投げかけているところです。

あと校則見直しのほうも、これは熊本市内全校でやっておりますが、生徒指導部に任せるのではなく、中心となるプロジェクトチームをつくりまして教師も全部入ってもらって、そこで全然ハードルなく、以前も熊本市のほうでZoomによる会議を、生徒も入れてしていただきましたけれども、そういったものの校内版を今、立ち上げているところです。

そして、令和5年度の開校に向けて制服のほうも併せて新しく見直したいということで、LGBTにも配慮した制服作りというもので、これも生徒からの意見を取り入れながら作るということで、準備を進めているところです。

いろんな意見はありますが、やはり現状を鑑みましたときに、例えば倍率の面でも昨年度、熊本商業あるいは熊本工業あたりも大変苦戦しております。同じ熊本市の公立高校の専門科の高校も苦戦しております。県のほうは高校の魅力化推進会議というものを立ち上げまして、いろんな検討をされてお

遠藤洋路 教育長

ます。ですが、やはりいろんな痛みは伴いますけれども、こういった改革というのは先行者利益があるかなというふうに考えておりますので、何とか令和5年にスタートできるように取りまとめていながら、より良いものをつくれるように準備していきたいなと考えているところです。

以上です。

古家幸生 総合ビジネス  
専門学校校長

総合ビジネス専門学校の古家校長、何かありますか。

本校は、令和5年の改革を目指しまして、昨年度から新しい学校に生まれ変わる準備を校内で検討し、教育委員会と連携しながら必要な改革を実施しているところです。

大きく分けて2つございます。1つは教育課程の変更です。これは令和5年を踏まえて今年と来年の新しい教育課程を編成しました。編成に当たりましては学生委員会の意見を踏まえて、その意見をかなり反映することができております。

それから、入試のほうですけれども、3か年で改革の計画を立てております。今年度は学生推薦という推薦入試制度を導入いたします。本校の学生が出身高校の後輩を推薦する入試でございます。これは日本中どこもやっていない取組でありますので、特色の1つになるのかなと考えております。入試に関してだけでなく、職員会議とか教育課程検討委員会、学校評議委員会、そういった会議にも学生が参画をしております。

本日のこの会議も全学生、教職員がオンラインで視聴しているところでございます。

また、学校評議員制度がありますけれども、今年度から学校評議員に崇城大学学生の古賀碧さん、株式会社C i a m oの代表取締役、若き起業家でありますけれども、この古賀さんにも学校評議員会に入っていただきまして、来るべき令和5年、起業家教育に向けて準備をしまいたいと思っております。

以上です。

遠藤洋路 教育長

ありがとうございました。

この2校は予定どおり進めたいということで、学校としての意向もそうだというふうに理解しました。

必由館高校は先ほど課長からもありましたが、一度学校のほうの案を取りまとめられますが、今後の進め方について、必由館の城野校長からありましたらお願いします。

城野実 必由館高等学校  
校長

必由館高校の部分で、生徒たち、同窓会も含めて賛成の部分というのは、SDGsを使って探究だったり少人数教育だったり、部活動の振興だったりということには賛成しておりまして、昨年度もISIF（国際イノベーションフォーラム）の京都大会に出たり、グローバル・フォーラムでパリ大会に出たり、熊本市で開催されたEducationWeekの中でも、その学びを発表しております。今年も熊本市が来年度開催する水サミットの1年前イベントでも、生徒たちはそういうグローバル教育についてしっかり検討して動いています。

昨年度、陳情した生徒会長の下に、彼が生徒会長になったところで校則の見直しということを任せるといことで、生徒会で案を出してもらって、その後職員と話し合っ、これは改革しよう、これはどうしようというやり取りをちょうど1月にやったところでした。その後、この改革案が表に出たところで、生徒としてみれば学校の中でこれだけの動きができたので、自分たちとしてはこういう思いだという思いで今、動いて生徒会としてこういうかたちを取りました。

かたちとしまして今、生徒も自分が思っている、必由館に来た思いとか、必由館でどういことをしたというものに対して生徒は自分たちの後輩にもこういうことをしてほしいという思いがあったり、同窓会は和太鼓だったりいろんところで活躍していることで自分たちが元気をもらっているという思いがあるので、その部活動とかそういうものに関して期待している部分が多いと肌では感じています。それぞれ視点が違う部分があるので、これを3つまとめてするというのは7月に出すのは厳しいかなという思いはあります。学校の教職員の思い、生徒の思いという分は7月に、先ほど課長が言われたように、出して、それを踏まえて同窓会の方々からご意見をいただいて、そのご意見が出た部分でまたこちらに提案していければというふうに思っています。

遠藤洋路 教育長

分かりました。7月の段階では、まず教職員と生徒の意見をまとめるという。それは例えば次回ここで校長が提案するとかそういう感じなんですか。それともそれは一旦学校の中でまとめて、同窓会の意見を入れた上で8月にやるとか、その辺は何か考えは。

<p>城野実 必由館高等学校 校長</p>	<p>今、私が考えているのは、やっぱり卒業生が2万1,000人いるので。110周年なんです、今年が。ですから、我々の案を見ていただくとという時間はとても必要だと思うんです。原案として、同窓会の方々がこの素案に対して学年の代表さんたちに意見を求めているのは、今月末で集計をすることにはなっています。だから、我々の意見を聞く前の段階で同窓会として提案をそこだけすることは可能ではありますが、先ほど課長が言われたように、生徒と、同窓会がそこを要望されると私は聞いていなかったの、生徒会と我々、学校の意見を見て同窓会が考えられるということであれば、今度の7月の教育委員会会議では、生徒の分と学校の分だけは私のほうから紹介できればと思っています。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>生徒と教職員の分を先に紹介していただいてもいいですし、7月にはそれをしないで同窓会の意見を入れた上で全部のものをまとめて紹介していただいてもいいと、どちらでもいいです。</p>
<p>城野実 必由館高等学校 校長</p>	<p>一度必要であれば7月に今はしようと思っていましたので、この後ご意見いただいて、同窓会の意見もまとめたほうがいいのかということであれば、その次8月以降になると思いますけれども。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>私たちとしてはどちらも可能なので、それは学校で決めていただいて。</p>
<p>城野実 必由館高等学校 校長</p>	<p>今、結論出せないの、この後の連絡でよろしいですか。</p>
<p>西山 忠男 委員</p>	<p>ちょっと時間かかりそうな感じを受けたんですが、必由館の高校教職員の方の陳情書には令和5年度という開校要件をもう少ししばらく猶予をいただきたいというご意見がございます。教育委員会としては1年遅れても構わないというスタンスで動くのか、あくまで令和5年度開校を目指すのか、その辺のスタンスはどうなんですか。</p>
<p>松永直樹 学校改革推進 課長</p>	<p>その点につきましては、先ほども少し触れさせていただきましたけれども、我々事務局内でも事前準備といたしましては令和5年4月を見据えるというふうにしてまいりたいというふうを考えております。一方、やはり様々なご意見もあられると思</p>

遠藤洋路 教育長

いますし、先ほど城野校長先生も申し上げられましたとおり、意見の集約には時間がかかる、協議には時間がかかるというはあろうかと思しますので、その点については令和5年4月ありきということではなく取り組んでいくことになるのかなというふうに考えております。

どういう案になるか次第という話ですね。  
他にご意見よろしいですか。

苫野一徳 委員

必由館の来月出すか出さないかというお話、私としてはまずは生徒と先生方のご意見を伺ってみたいと思います。さらに同窓会の方でまた別にいただけると、丁寧に経過が追えるんじゃないかなと思うので、私としてはそのようなお願いをしたいなど。

遠藤洋路 教育長

分かりました。それも踏まえて校長のほうでご検討お願いします。

他によろしいですか。

では、他にないようでしたら、採決を行います。

議第48号 市立高等学校・専門学校改革基本計画(案)、千原台高校、総合ビジネス専門学校編についてご承認いただくことにご異議ありませんでしょうか。

(異議なしの声)

遠藤洋路 教育長

異議なしと認めます。

議第48号については原案のとおり決定いたします。

[採決] 【原案どおり承認された】

・議第49号 熊本市放課後子ども総合プラン運営推進委員会委員の委嘱について

《田口 清行 青少年教育課長 提出理由説明》

[採決] 【原案どおり承認された】

- ・議第50号 熊本市立野外教育施設運営協議会委員の委嘱について

《田口 清行 青少年教育課長 提出理由説明》

[採決] 【原案どおり承認された】

- ・議第51号 令和4年度(2022年度)熊本市立高等学校入学者選抜の基本方針の制定について

《石加浩二 指導課長 提出理由説明》

西山忠男 委員

2ページの通学区域の話ですけれども、質問と意見があるんですが、なぜ学科・コースによって枠のパーセンテージがこんなに違うのか、これが質問です。意見は、入試の倍率が低いのであればこの枠は撤廃してもいいんじゃないかと思うんですが、いかがでしょうか。

石加浩二 指導課長

入試枠のパーセンテージですけれども、普通科のコースによって確かに違いがございます。これについて、元々はパーセンテージ枠のところについて詳しく規定がこの数字なんだというところについては、申し訳ありませんが、まだ把握しておりませんので、後日調べてご報告させていただきたいと思います。また、これについて、枠を撤廃すればいいんじゃないかということについてのご意見につきましては、こちらでまた検討させていただきたいと思います。大変申し訳ありません。

西山忠男 委員

これは入試改革、学校改革の中で考えていただければいいことかもしれないんですけれども、確かに熊本市民のための学校という趣旨はありますから、完全撤廃がどうかなという気もしますけれども、でも、良い学校をつくれればよそからも良い生徒が集まってくるという考え方に立てば、これは撤廃してもいいような気がするんです。そういうことも改革案の中で考えていただければありがたいと思います。

遠藤洋路 教育長

何かコメントありますか。

石加浩二 指導課長	学校改革推進課と一緒にまた考えていきたいと思しますので、ありがとうございました。
松永直樹 学校改革推進課長	入試のあり方につきましては、各学校現場と現在協議を進めております。様々なご意見があろうかと思いますが、高等学校であることから、やはり基本的には市内の生徒に入ってきてほしいというのがある一方で、入試で既に市外からたくさん入ってきているという現状がございますので、高等学校の現状も十分に踏まえまして、この点については検討を進めまして、また改めまして内容については報告させていただきたいというふうに考えます。
苫野一徳 委員	今の西山委員の発言に関して、市立高等学校の改革検討委員会で、こういった意見も出たということを少しお話しさせていただければ。議事録等に残っていると思うんですけども、県とか市とかこういった地域で食い合うことは意味がないけれども、本当にむしろそんなことをすべきでないけれども、良い学校にして全国いろんなところから来ていただければすごくいいんじゃないかと。地方の活性化としてもいいんじゃないかという、そんな話はあって、私もそうかなと思っているところです。
遠藤洋路 教育長	<p>ですので、市内と市外に分けるということもやっているわけですが、県外からのということがもしあれば、それはいいのかもしれないですね。その辺も含めて高校改革でこれから検討していくということです。</p> <p>他にありますか。よろしいですか。</p> <p>他になれば採決を行います。</p> <p>議第51号 令和4年度(2022年度)熊本市立高等学校入学者選抜の基本方針の制定について、ご承認いただくことにご異議ありませんか。</p> <p>(異議なしの声)</p>
遠藤洋路 教育長	ご異議なしと認めます。 議第51号については、原案どおり決定いたします。

[採決] 【原案どおり承認された】

- ・議第52号 令和4年度(2022年度)熊本市立平成さくら支援学校入学者選抜の基本方針の制定について

《若杉敏郎 特別支援教育室長 提出理由説明》

出川聖尚子 委員

4ページ目にあります出願資格の要件で、新しく平成さくら支援学校の教育相談を受けている者とするという要件を加えられたことに関して、どうしてこの要件を加えられたのか教えてください。

若杉敏郎 特別支援教育室長

今、委員のご質問にありました出願資格に教育相談を受ける者とするというのを付け加えた理由について、まず高等部の入試につきましては、高等部の中で行われます教育内容がそのお子様にとってどうなのかということを確認するために教育相談を受けるということをこれまでも実施していたところですが、そのことが出願資格の中に位置づけていなかったものですから、今年度から明記させていただいたという経緯になっております。

以上です。

出川聖尚子 委員

追加で質問ですけれども、今まで教育相談を受けずに出願されたということはないということなのでしょうか。

若杉敏郎 特別支援教育室長

最終的にはそのような状態にはなっておりません。出願に際しまして、高等部に進学しようというお子様たちがどの学校に進学しようかということをしっかり考えること、これは非常に重要なことであると思っています。時期にもよりますが、教育相談がしっかりできていれば、それはもちろん大丈夫ですけれども、教育相談ができていない状況の中で出願をする可能性もありますけれども、そのときには追加の教育相談と申しますか、その時点での教育相談をそれぞれの学校でも行うかたちを取ったうえでしっかり出願し、そして受検をしていただくということで対応しているところでございます。

以上です。



<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>これは、つまり各校に教育相談を全く受けていない人が続々と出願してきて困ったということで設けたわけではなくて、もともとやっていたことをここに記載したという、そういう理解ですか。</p>
<p>若杉敏郎 特別支援教育室長</p>	<p>今、教育長のお話のとおりということと、やはりそれぞれ学校で教育課程も違ったりしますものですから、やっぱり学校の教育というのをしっかり知っていただく。そのためには教育相談を受けていただくということが非常に支援学校では必要ですので、これをしっかり位置づけさせていただいたということです。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>他にいかがですか。</p>
<p>西山忠男 委員</p>	<p>二次募集についての説明がよく理解できなかったのですが教えていただきたいですけれども、志願者が非常に多かったとおっしゃいましたよね。それで彼らの進学先を確保するために二次募集とおっしゃいましたね。でも、一応募集定員があるわけでしょう。募集定員、志願者が多ければ募集定員より少なく採用して、また二次募集をやるということなんですか。</p>
<p>若杉敏郎 特別支援教育室長</p>	<p>まず、先ほどの説明で少し触れさせていただいたのですが、知的な障がいをお持ちの支援学校を希望するお子様たちにとっては、やはり入試の後、どこかに就学をする、それが非常に重要だというふうに思っています。先ほどの説明の中に、ある熊本市内における県立の支援学校に20名近く、十数名なんですけれども、募集定員をオーバーするような志願者が出まして、もちろんそれで定員の中で合否があるんですが、その後、不合格であられた方に対しては二次募集のシステムがあり、他の定員に満たなかった学校の人数を二次募集で追加に募集することになりますから、それが子どもさん、保護者の希望になったときに、そこでも様々な可能性は数字的に出てきたということで、その次の二次募集の追加ということを考えないと高等部への希望をしても二次募集までで決定できない可能性が出てきたということがございます。結果的には昨年度末、二次募集の追加という措置をしましたがけれども、二次募集の追加というかた</p>

	<p>ちでの入学はなく、二次募集の段階で進学先は決まったということはありません。</p> <p>以上です。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>これはなぜ三次募集じゃなくて二次募集の追加ということなんですか。</p>
<p>若杉敏郎 特別支援教育室長</p>	<p>昨年度末に二次募集の追加ということの検討を一緒になって行ったわけですが、元々、受験の中に三次募集というのが基本方針等にもなかったものですから、三次募集ということ昨年度の段階で行うに当たっては、基本方針からの変更等も求められることで、二次募集の追加というかたちを取らせていただくことで昨年度のできる対応を考えたということになります。</p> <p>以上です。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>昨年度の基本方針に二次募集までしかなかったから、二次募集の追加にしたんですね。来年度の基本方針に新しくつくるんだったら、二次募集の追加にしなくてもいいような気がします。こういう名前が1回やったのなら、これがいいんじゃないかということですか。分かりました。</p>
<p>泉薫子 委員</p>	<p>支援学校の場合は適切な教育を必要な子どもにやっていただくという、そういう割り振りが非常に大事なというふうに考えますので、その際の教育相談も非常に重要だなというのは理解しています。そういうふうに入学前に保護者さんと障がいの程度と学校とある程度相談して割り振って入学してもらっているようなイメージがあるんですけども、そのように偏るというのは何らかの要素があると思うんですが、どういった要素があるのかということと、そういう学校間で話し合いとか、どういったことを望まれているので、そこが偏るのかとか、どういった教育が県全体で本当に必要なのかというのを少し検討していただくと、そういった偏りがなくなるのかなというふうに考えました。</p>
<p>若杉敏郎 特別支援教育室長</p>	<p>委員ご指摘のように、受験される子どもさんたちにとっての就学というのは非常に大きな問題でございまして、本人やご家族にとってもとても人生の中でも重要なことだと思います。し</p>

かしながら、入試というかたちを取っておりますので、最終的には本人とご家族が進学したいところを受験されるというかたちを取ります。そこで高校側も高等部側につきましても情報交換とか高等部側でのいろんな情報はするとは思いますが、その子どもたちをしっかりと受け入れていくということでの共有が大事だというふうに考えております。そういう意味でも、今後も県と市と一緒に整備計画、県のほうに設置義務がありますが、整備計画につきましても今後検討しながら子どもたちが前向きに高等部の中で頑張っていけるような熊本市としての考え方も研究していかなければいけないというふうに思います。

以上でございます。

遠藤洋路 教育長

よろしいですか。

西山忠男 委員

いろいろ考えていただいてありがとうございます。

遠藤洋路 教育長

他にありませんか。よろしいですか。

では、他にないようでしたら、採決を行います。

議第52号 令和4年度(2022年度)熊本市立平成さくら支援学校入学者選抜の基本方針の制定について、ご承認いただくことにご異議ありませんでしょうか。

(異議なしの声)

遠藤洋路 教育長

ご異議なしと認めます。

議第52号については原案のとおり決定いたします。

[採決] 【原案どおり承認された】

#### 日程第4 報告

- ・報告(1)「(第1期)学校改革!教員の時間創造プログラム」における実績報告及び今後の取組について

《松永直樹 学校改革推進課長 報告》

小屋松徹彦 委員

まず、これまでの3年間のプログラムの成果というのは、時

間を短くするというのは非常に成果が見られたという点では私も評価したいと思います。ただ、今の5ページのグラフをいろいろ見ておきますと負担感の部分、これを中心に見てみたときに、14の調査回答その他の事務、それから通知表関連業務、指導要録関連作成業務、この辺の負担感というのは数値が高いなということを感じました。これから考えられることとか、確かに時間は短くなっているけれども、果たして現場の先生方の負担感というのが必ずしも減っていないんじゃないかなという気がするんです。それは何なのかというと、例えば時間は短くなったけれども、業務内容がかなりまた複雑高度化してきたとか多様化したとか、そういうことからして時間ではなくて仕事の中身で負担感というのが随分増しているんじゃないかなというのを表から感じたんです。それで、今後の時間創造プログラムの取組の中で、まず目的は授業準備等の時間が確保できるかどうかというのが一番大事なところです。それから家族や仲間と過ごして心豊かな時間を確保するというのが目的になっていますが、果たしてこの目的が達成できるような状況なのかなというところから見て、取組の中にもう1つ大事な視点は、今、先生たちが抱えている仕事をもう少し精査する必要があるんじゃないかと。先生のやるべき仕事とやらなくていい仕事とか、これらの区別をもう少し突っ込んでやらないと、なかなか先生たちにプログラムの目的であるところの、豊かな時間の確保ができないのではないかなという気がしますので、もう少し仕事の中身の精選といいますか、そういったことと、それから譲るべきところは譲っていくという、そういうことをもうちょっと意識してやっていく。そのために地域とか社会全体を巻き込んでいく、時間創造プログラムの働き方改革の中に地域を巻き込むという視点をもう少しやっていったらいいんじゃないかなと思いました。

感想です。以上です。

松永直樹 学校改革推進  
課長

本調査におきましては、私たちとしましても結果については大変興味深いものがあったと思っています。時間数が非常に短くても負担感が多い。例えば、このご説明でいきますと調査回答がございます。やはりこれは先生方が例え時間が短くても調査の意義が感じられているかどうか、これを自分でやらないといけないのか。そもそもこの調査は必要なのかとか、それについて疑問がある場合に、時間は短いものの負担感があ

るとか、そういった状況もあろうかと思っております。また、仕事の精選というようなところがございますが、私たちが学校現場と一緒に進めているところがございますが、通常業務があられる中、何をどこまで願いますかというのが非常に整理として大事だと思っております。ですので、私たちといたしましてもその点には十分に留意したプログラム、改革を進めてまいりたいというふうに考えています。

また、業務も先生方が担わないで済むようなあり方、旧プログラムでまいりますとシステム導入におきまして様々効果が出ております。給食費、学校徴収金につきまして負荷が一番大きなところだったのかなというふうに思いますが、その点につきましては、大きな効果が出ている一方で、導入した初年度、次年度あたりは新たなシステムに慣れるということで、かなり精神的な負担があった。時間が減ってもやはりそこについては非常に負担感があるということがございますので、システム導入後も継続して丁寧にフォローアップしていくというようなこと、そういった点も大事かなというふうに考えております。

こういったことを周知できましたら、まだまだ整理できて、数年後にはもっと変えていくというふうなこともできるのではと考えております。

最後に地域の巻き込みというか、地域の方々へどういったことをお願いしていくかというのは非常に大事な部分かと思えます。コロナ禍におきましてなかなかその点については難しい部分もございますが、地域のご理解を得ながら進めていくというのが非常に大きいと思えますし、地域の皆様と一緒に学校をつくるということになりますと、そもそもプロジェクトへの協力そのものが見本にもなっていくかなというふうにも考えておりますので、その点につきましてもプロジェクトの中ではしっかり検討を進めてまいりたいと考えております。

小屋松徹彦 委員

以前聞いたことがあることをお話ししますが、教育委員会からの文書が非常に多いというのを一部現場から聞いたことがあるんですけども、今はどんな状況なんでしょうか。

松永直樹 学校改革推進課長

現実そういった状況はあるという認識はございまして、アンケートも含みまして様々取組を進めてまいりました。内容の精選でございますとか、出すタイミング、そういったものも含めて各課においても検討いただいているところでございます。一

苦野一徳 委員

方、昨年度におきましてはコロナ禍というこれまでにない状況がございまして、特別の対応、特別の調査をせざるを得なかったというところもございます。今後、引き続きコロナ禍ということで様々学校現場の皆様にはご負担をおかけすることもあるかと思いますが、ご指摘の点も留意しながら進めてまいりたいというふうに考えております。

先ほど地域を巻き込むという話をしましたけれども、要は学校の先生方が非常に多忙だということの多忙の内容というのが、多分保護者の方を含めてなかなか社会的に理解が得られていないんじゃないかなという気がするわけです。ですから、そこをもう少し理解がないと多分働き方改革を進めようとしても、そこで社会からの、何でそんなこととか、楽をするためとか、そういう意見が返ってきてしまうから、そういった面でもう少し学校の先生方がやっていることをどういうことをやっているのか、これは本当にそれでいいのかというようなことをやっぱり問題提起として出していく必要があるのかなというふうに思います。今度の広聴会あたりはその1つのきっかけになればなというふうに思っていますけれども、そういう観点を大事にしながら先生たちが授業教材の準備に時間をきちんと取れて、良い授業ができたという、そこに繋がるような方向を我々も一緒に目指していかないといけないかなというふうに思いました。

遠藤洋路 教育長

他にありませんでしょうか。

西山忠男 委員

4ページの書き方、新しい取組が2つございますが、年休取得の推進というのがございますけれども、それは目標としては分かるんですけども、先生方に見たら忙し過ぎて年休なんか取れませんかというのが実態なんじゃないかと思うんです。それで、無理に年休取りなさいといっても、出勤日にしわ寄せが来て、また長引いてしまったりとかいうふうにはならないでしょうか。その辺はどうお考えですか。

松永直樹 学校改革推進課長

年休の取得推進につきましては、教育現場だけでなく市役所全体として今、取り組んでいるというようなところでございます。様々お話をお聞きしていきますと、やはりまず第一に年休取得が進んだ職場の特徴といたしましては、取りやすい職場環

境を管理職が作り出してあります。そういう雰囲気づくりに非常に留意をして取組を進めているというのがまずございます。

一方で、教職員におきましては、通常の行政職員と異なる勤務の形態でございます。ですので、特別の対応というのも考えていけないといけないというふうに考えております。その中で1つ検討しておりますのが、職員の年休取得につきましては、1月から12月の間で20日間取れるというような制度になっておりますが、実際、年末に年休が余ったとしてもなかなか現実取りづらいというような現状がございます。そうした状況がございますことから、年休の取得期間を9月から8月の1年間に変えられないかということで考えております。こちらにつきましては条例改正や関係団体との協議等も必要になってまいります。使用切れなかった年休については8月の夏休みに一度に取るというようなことが考えられます。実際、他の自治体においてそのような改革を行ったことで、年休の取得が推進されたというような実例もございますので、そういった学校ならではの状況も踏まえた改善というものも図ってまいりたいと思います。

遠藤洋路 教育長

他にいかがですか。

泉薫子 委員

5ページの表を見ますと、通知表関連の負担感というのが非常に大きいというふうに感じるんですけども、取組項目の中にも通知表の簡略化というのが挙げてありますが、具体的にはどのようなものを考えておられるのかということと、学校によっては2学期制を取り入れて通知表を出す回数を減らしているという学校があるのではないかと思います。そういった具体的な取組がどのくらい進んでいるかなどを教えてください。

石加浩二 指導課長

通知表については、いろんな子どもたちの様子あたりを書いていかななくてはならないですし、また成績あたりもいろんな資料から見なくてはいけないということで、かなりの時間がかかることとなります。

どのようなかたちで具体的に通知表の中身だつたりを簡略化していくのかということですが、まず通知表の回数を昨年度からなんですけれども、2回にしております。昨年度はコロナの

	<p>影響もございまして2回にしたということになっているんですけれども、今年度はそれを継続して2回にして、1回まず減らそうということで取り組ませてもらうと。2回に減らすことと、あと中身についても書いている量が非常に多かったりしているところもありますので、ある程度事実に基づいたものにして簡略化できるところは簡略化をするようにということで、校長会のほうとも連携を取りまして中身のほうも精査をしているところでございます。</p>
遠藤洋路 教育長	いいですか。他には。
苫野一徳 委員	これを拝見して思ったことなんですが、まず今、働き方改革の主体といいますか、誰が主体的に参加されているのかという、つまり教育委員会がただ旗を振っただけでは全く意味がないと思うんです。現場の先生方一人一人や管理職の皆さんが、自分が主体なんだという意識でいらっしゃるのか、自分たちがそのような改革を実現するプレーヤーなんだという認識でいらっしゃるのか、教育委員会をこうしてくれよという認識でいらっしゃるのか、このあたりの感覚はどういう感じでしょうか。
松永直樹 学校改革推進課長	<p>認識としましては、当然、学校長におきましては、学校現場で自分の問題として考えていただいていると思います。我々は直接的には校長へ説明し取組をお願いしているというところでございますが、各学校現場からの反応としては、自分のこととして取り組んでもらえるよう伝わっていると思います。ですので、教育委員会がやるべきものだという認識は、各学校においてははないと思います。ただ一方で、やはり我々事務局のほうで整理をしていくことも多数ございます。そこにつきましては、システムの改修部分も含めてですけれども、当然我々事務局が主体的に動かないといけないというのがございますので、役割分担といいますか、それぞれの立場からそれぞれ取り組んでいくのが非常に大事だと思います。</p> <p>また一方で、それぞれ別個に動くということになりますとロスもあつたりとか、思いがずれたりとか、もっと合理的なことができるかもしれないのにできないこともあり得るかというふうに思っておりますので、プロジェクト会議等を使いながら、しっかりと情報共有を図る。また、様々な広報媒体がございまして、そういったものを使いながら、それぞれの意見もしく</p>



苦野一徳 委員

は取組状況の共有等を進めていくことで、そこに齟齬がないようにやっていきたいというふうに考えております。

ありがとうございます。こちらを拝見していると、システムICTの導入等々のシステムに関してはかなり多いなと思うんですが、もはやシステムの次元で時間を創造するというのは限界に達するんじゃないかなと思うんです。次のフェーズは本当の本丸だと思うんですけども、学校で働き方改革等がうまくいっている学校は、時々先生方がみんなで話し合っただけで断捨離しているということですよ。大阪の大空小学校で一番最初にやったことというのは、先生たちみんなで話し合う場をしっかりと設けて、子どもの育ちに関係のない仕事を全部断捨離するというのをやったんです。そうすると、子どもの育ちに関係のある仕事だけを集中してやると、先生はやる気になりますし、これをやるというのが一番の本丸だと思います。現場の先生方が一番分かっているわけです。でも対話の機会がないと、仕方ない、今までやってきたからやるかになっちゃうと思うんです。でも、話をして、やっぱりこれ要らないんじゃないかなというような話になったら、どんどん断捨離もできるし、やってみたら意外にうまくいったと、そういうことがいろんな例を見ているとあると思うので、ハードのシステムで何とかするというフェーズは限界というか終わって、次は中で対応していく、それを限界値といいますか、そういった機会をぜひ先生方が、まさに先ほど私が言いたかったのは、先生方がプレーヤー、主たるプレーヤーであるという、そういうフェーズをいかに実施していくかということだと思うんです。それをどうやったら実現できるかなというのを考えて、今度の校長会もそういったことの1つのきっかけになればいいなと思うんですけども、何かもし今の現状だったり、アイデア等があればお聞きできたらなと思うんですが。

松永直樹 学校改革推進課長

今すぐ具体的には思いつかない部分もございますが、最近やったことで申し上げますと、学校現場の事務の方がそれぞれアイデアを持ち寄りになりまして、プロジェクトを自主的に立ち上げられまして、その取組について我々も共有を進める、若しくはこういう方向で考えていかないかというふうに提案をいただくということがございました。当然学校長のマネジメントというのは非常に大事だと思いますが、横の連携を含めまして

苦野一徳 委員

様々な枠組みで取り組むということが大事なとも思います。そういったことも含めまして、プロジェクト会議メンバーにつきましては、様々な職種の方、校種の方にもご参加をいただいて進めているところですので、その中で今いただきましたような問題提起を共有いたしまして、何ができるのかというのを各学校現場としっかり共有しながら進めてまいりたいというふうに考えます。

炎上した教師のバトンですね、遠藤教育長も私も応援団ですけども、たくさんの悲痛な声を聞きながら思ったこととして、文科省なり教育委員会なりに、かなりお門違いな批判をしているなというのがたくさんあったんですね。それは文科省マターじゃないよという、各現場でやる、できることだというのがすごくたくさんあったんです。事程左様に現場でそういった声が聞かれないのかなということが、私は第一の問題だと思ったんです。ということは、逆に言うと、現場の中で何か思っていることがあったらちゃんと気軽に言えて、問題だと思うんですけどもということがちゃんと言い合えて、確かにそれは問題だね、じゃ、何とかしていこうかと、こういう対話がいかにそこに組み込まれているかということが結局ある話が多いかなと思うんです。そう考えると、そっちの文化づくりに本腰を入れるということを、繰り返しかもしれませんが、もしないと、この目標はなかなか仕事の総量を減らすという方針のところにはありましたけれども、ここのそれは現場でそういった断捨離をしていかない限り難しいかなというような印象を持ちました。ありがとうございます。

遠藤洋路 教育長

では、他にありますでしょうか。よろしいですか。  
では、他にないようでしたら、この件は以上といたします。

・報告（2）令和3年度（2021年度）実施 熊本市立学校教員採用選考試験の志願状況について

《濱洲義昭 教職員課長 報告》

遠藤洋路 教育長

これまで志願者をいかに増やすかという議論もここで1回検

	<p>討しましたけれども、この結果を見ると横ばいということで減ってはいないけれども増えてもいないという、こういうことです。一方で、採用数はどんどん増えているので、倍率は年々低くなるとういう状況ですが、これからまたいかに志願者を増やしていくかというところを議論していかないとと思います。</p> <p>苦野委員、どうですか。教育学部から見てこの結果というの はどんな感じでしょうか。</p>
<p>苦野一徳 委員</p>	<p>何度もこちらでも語っているように、教育学部生たちの教職志向離れというのはやっぱり顕著かなという感じがしているんです。時間創造プログラムと連携して、どれだけ先生たちのことを大事にしているというか、そういう姿勢を実践的に出していきたいなとは思ったところです。すみません、具体的なアイデアが今のところなくて申し訳ありません。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>すごい基本的な疑問なんですけれども、働き方改革が思いっ切り進んで、みんなが定時に帰れるようになったら教員志願者はすごく増えるんですかね。</p>
<p>苦野一徳 委員</p>	<p>それはそう思います。学生たちと話していると、やっぱり基本、働き方が最大の理由だというのは思います。アンケート等たくさん取っているんですけれども、ネックはそこにあるというのが明白かなという感じです。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>そもそも教師になりたくない人が増えているってことではないということですか。分かりました。</p>
<p>西山忠男 委員</p>	<p>質問ですけれども、県外からの受験者の割合って分かりますか。</p>
<p>濱洲義昭 教職員課長</p>	<p>手元にございませぬ。今後、採用計画を作る段階で皆様にご意見をいただくときにご報告をしたいと思ひます。</p>
<p>西山忠男 委員</p>	<p>意外と熊大教育学部からの受験者は少ないんですよね。期待したほど多くはない。そこを期待せずに県外からどんどん受験してもらおうような働きかけも必要かなと思ひたものだから。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>熊大は、意外と熊本出身じゃない人が多いですよね。県外の</p>

小屋松徹彦 委員

大学から受ける人は熊本が地元の人ということで、結局は地元志向なのかもしれないですね。

そういう報道もありましたね。特別枠みたいなものがあったでしょう。熊大、熊本県の。

遠藤洋路 教育長

熊本県の採用試験を受ける人用の枠、熊大ですね。県は僻地というんでしょうか、そういうところ用の人を確保するというで、そういう枠をつくると言っていましたけど。直接、熊本市だと、その理屈は当てはまらないかなと思います。でも、そうやって学生のと時から必要な人を確保するという、そういうことでしょうね。

泉薫子 委員

聞いていて感想なんですけれども、仕事としての教員というのは非常に魅力が、やりがいがある仕事ではないかなと。たくさん先生の先生たちと関わる人が多い仕事を私はやっていますので、それは感じるんですけれども、その魅力を削いでしまう要素は何かというふうに考えたときに、応援団がないというか、サポートがない感じがされているんじゃないかということと、一人一人で仕事をしなくちゃいけない仕事、医者もそうなんですけれども、個人で仕事をしないといけない仕事なので、すごくサポート感がないと難しいのかなという、そういういろんな環境、職場としての学校のあり方という、職場として考えると非常に孤立感が大きい職場じゃないかなと感じるんですが、うまく説明ができないんですけれども、そういったシステムづくりは大事なんじゃないかなというふうに感じました。

濱洲義昭 教職員課長

今、泉委員がおっしゃったことなんですけれども、採用試験の前に大学生向けの説明会を開きまして、最後にアンケートを取ったんです。教師になるとして不安に思うことは何ですかというふうに聞いているんですけれども、一番多かったのが保護者との関わり。それから2番目に採用後にすぐ1人で教壇に立つこと。それから3番目が授業の進め方。ですので、今、委員がおっしゃっていただいたように、サポートが本当にあるのかどうか、そういったご不安もあるのではないかなというふうに見ております。

さっき苦野委員がおっしゃった時間外勤務と申しますか、長時間労働の部分についてもアンケートの質問の中でどんなこと

泉薫子 委員

を教師になるとしたら希望したいですかという話を聞いているんですけども、上位にあるのが時間外勤務の削減と教材研究の確保の時間が欲しい、こういったところが挙がっておりますので、こういったところを改善していくといいのかなというふうに思います。

やはりそうじゃないかなと思うんです。必ず私たちが新人で出るときには、指導員というのがつくんです、最初の1～2年間は。そういったシステムですとか、1人に1人じゃなくてもいいけれども、新しく新採で入ってきた人には必ず指導員なりを必ずつけるとか、そういったサポート感というのは大事ではないかなと。

森江一史 教育次長兼  
学校教育部長

初任者につきましては、各学校に初任者研修指導教員が付きまして、担当する教員が自分の担当する初任者を5人担当しておりますし、各学校を回って指導しておりますし、各学校にも校内の初任者指導担当教員がついておりますので、制度上は拠点校指導教員と校内の指導教員が初任者を育てるという環境になっております。そこがうまく機能するように教育センターを中心に支援をしているところなんですけれども、課題もあるというふうに思います。

泉薫子 委員

そういったシステムをしっかり構築してPRされるといいと思います。

菅野一徳 委員

初任者の担当の先生と合わない場合があるんですよね。なので、全員で支えるんだという、そういうシステムにしちゃったほうがいいんじゃないかなと思うんです。初任者の先生と合わなかったりすると余計に苦しいと思うので、初任者は全員が支えてくれるなら、誰でも困ったら助けを求めに行っていんだなというような、それが基本ですよというような仕組みづくりとかメッセージを寄せられるといいなというのが1つと、泉委員がおっしゃったように、孤立というか、特に日本の学校システムというのは担任の先生の1人の肩に全てがのしかかるシステムになってしまっているの、これを固定担任制じゃなくて全員担任制だったり、学年全員で子どもたちの担任だという意識を持っていくような、そういう仕組みが大事ですよというお話もさせていただいたときに、既にやられている学校がちょく

ちよく出てきたという話があるので、そこがもうちょっとうまく機能していくためには、どういった条件を整えればいいのか、1回研究を重ねて、うまくいきそうであれば水平展開も考えていくような、とにかく孤立しないで先生たち自身が、それこそあまりにも孤立すると、何か学級で問題が起こっても相談できなくて隠すとか、そういうことがどうしても起こってきってしまうので、子どもたちはみんな育てていくんだよという、この文化づくりですよ。これを制度として例えば担任制度、固定ではなくそういったことも積極的に検討していきたいなと思います。

小屋松徹彦 委員

学校の1つの特徴といいますか、3年ぐらいで転勤しますよね、学校移りますよね。そうすると、何かいろいろ不都合なことがあっても、この学校にいる間は我慢しておくか、言わずにしておくとか、事なかれ主義で済ませてしまうというような風土ができやすいんじゃないかなと思うんです。我々みたいに企業はずっと長く一緒にいますので、何とかその中でさっきおっしゃったように、みんなで育てようとか、そういう風土もできやすいんですけれども、学校はそこら辺が少し難しいのかなという点があるんです。だから、でもやっぱりさっきおっしゃったように、みんなでサポートするという、信じあってですね。こういったことは風土としてつくっていかなくちゃいけない。それをやっていくのは校長、教頭、いわゆる管理職の方々がどれだけのマネジメントをできるか、そこにかかってくると思うんです。だから、そこら辺のいわゆる役割といいますか、役職の方がそれなりの意識を持ってやってもらう。あと3年我慢して何もなければこれで終わりみたいな、そういうふうな考え方はもちろん持ってほしくないと思いますし。最近、先生の数が少なくなっていて、辞めていく人が多いから、退職した後で、もう1回現場に戻ったらどうですかと言うことがよくあるんです。結構です、もういいですとおっしゃる方がいるんですね。ということは本当に辞めたかったんですかという、我慢していたんですかみたいな、そういう風土がどこかに学校にあるんだなと。ここを変えないとやっぱり若者も絶対教員になろうと思わないなと、そういう気がしますので。これは喫緊の課題だと思うんですけれども、何とかしてこれを変えないと、さっきの小学校の2倍じゃないですけれども、大変ですよ。

森江一史 教育次長兼  
学校教育部長

ありがとうございます。初任者研修につきましては、課題について整理をしまして、また取組を考えて工夫していきたいと思います。一例としまして、今日の熊日新聞の朝刊にも紹介してございましたが、東野中学校においてチーム担任制ということで、担任を固定せずに、これは東京の麴町中学校の取組を参考にした校長の提案で、昨年は1年だけだったんですけども、今年度は全学年に広げてやっているという取組をしております。私も成果等を聞いておりますけれども、ぜひこの取組を少しずつ広げていけないかなと思ひまして、昨年度末はまず教育委員会の私たち職員がその取組を知らなかったものですか、教育センターにおいて校長の取組についての研修を持ちましたし、本年度の取組の中にぜひ東野中学校の取組に学ぶという研修を入れております。少しずつそういう取組が始まっておりますので、ぜひ成果を共有して課題解決に向けて取組をしたいと思ひます。

苦野一徳 委員

今のお話に関してなんですけれども、そういった取組は少しずつ考えていて、本当に素晴らしいなと思ひていて、他方で麴町中学校の取組、結構全国でいろいろとやられて、形だけされて現場の子どもたちも先生もすごく困っているというのをよく聞くんです。定期試験をなくして、いつでも自分のタイミングで受けられる単元テストなり実力テストなり、そういったときに、何のためにそれをするのかということがしっかり共有されていなかったら、子どもたち結局テスト漬けにされて余計苦しいみたいな、そういう話をよく聞きますし、固定担任制を止めた場合も、これは実際熊本の子どもから聞いたんですけども、誰に頼ればいいのか分からなくて余計心配みたいなことがあって、つまり何のためにこれをやるのかってみんな統一する必要がありますよね。困ったときはあなたの担任の先生だけじゃなくて、この学校の全員が担任だから、取りあえず誰に頼ってもいいんだよという、こういうメッセージをしっかり発していくことが大事かなと思ひるので、何のためにやるのか、これをちゃんと共有するというのを大事にしたいなと思ひのと、あともう1つ、賛否があると思ひんですけども、例えばヨーロッパの職員室と違ってカフェかなと思ひするような場所なんですよ。お菓子が置いてあって、コーヒーメーカーがあって、飲み放題で、生徒たちも当たり前のようにそこに来てすごくフラットな関係性で、お互いファーストネームで呼び合うような、こ

これは文化の違いがあるのであれですけども。居心地がとてもいいなと思うんです、カラフルで。日本には熊本の学校も職員室もすごく安心するなというか、何かあったらすぐに雑談ができるような、お菓子とコーヒー飲みながら、そういうすごく温かいリラックスした環境づくりというのも考えていいんじゃないかなと。常に緊張していなければいけない場みたいな、それよりはもっともっと柔らかくなれるような場づくりというのも考えていいんじゃないかなと思ったりするところです。

遠藤洋路 教育長

職員室を和室にしますか、そういうことだったら。今の苫野委員の意見を聞いて、また検討をお願いします。

他にありますか。よろしいですか。

では、他になれば、この件は以上といたします。

・報告(3) 令和3年度(2021年度)実施 熊本市立学校管理職等採用選考試験について

《濱洲義昭 教職員課長 報告》

#### 日程第5 自由討議

(1) 特別支援教育の現状と課題 — 平成さくら支援学校開設から5年目、あおば支援学校開設から2年目を迎えて —

《若杉敏郎 特別支援教育室長 竹内賢二 平成さくら支援学校校長 西正道 あおば支援学校校長 提出理由説明》

遠藤洋路 教育長

では、ただ今から討議に入ります。どなたでも結構ですので、ご質問、ご意見その他あれば。

西山忠男 委員

平成さくらのほうにお尋ねいたしますけれども、5ページの学校評価の結果を見ますと、学校の支援体制と自立と社会参加に向けたと取組のところで、保護者の方で「どちらかといえばそう思わない」、「そう思わない」と回答された方が若干おられますよね。若干名だと思えますけれども、これはどういったご不満だったのか分かりますでしょうか。

竹内賢二 平成さくら支援学校校長

このアンケートが無記名式ですので、直接聞き取ったわけはありませんが、学校への保護者からの相談などから私が考え



	<p>るところでは、先ほど申しましたけれども、多様なニーズに対して学校として十分に対応できていないという相談等もありますので、そういったところでの支援体制で「どちらかといえばそう思わない」という回答が出てきているのではないかと考えております。</p> <p>また、自立と社会参加に向けた取組にしましても、本人がどういった仕事に自分が向いているのかとか、どういった仕事をしたいのかなど、3年間では十分に定まらずに移行支援事業所を利用する生徒や、在宅の生徒もおりますので、そういった点でしっかりと生徒の就労の希望に応えられていないというアンケートの結果が出ているのではないかと考えております。</p> <p>以上です。</p>
西山忠男 委員	<p>あおば支援学校のほうは保護者の満足度が高いですね。それで、平成さくらのほうでそういう若干不満な保護者の方がおられるというところで、やはり高等部になってくるとなかなか難しい面が出てくるということなんでしょうか。</p>
竹内賢二 平成さくら支援学校校長	<p>高等部になりますと、特別支援学校から入学してくる生徒、また中学校の特別支援学級から入学してくる生徒もいるため、生徒の特性、ニーズあたりも本当に多様化しております。特に高等部に入ってくるときに、二次的障がいから、不登校傾向のお子さんや、なかなか集団に参加できない生徒さんも実際に年々増えておりますので、そういった生徒への対応という点で、学校としても組織的に対応し、また教員一人一人の専門性もより高めていかなければいけないと考えております。</p> <p>以上です。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>よろしかったですか。</p> <p>高等部のほうが、そのまま卒業したら就職というか社会に出ますから、その違いはあるんでしょうね。</p> <p>この「そう思わない」というところの数字が出ていないので何とも言えないですけども、人数というか、割合というかはどのぐらいなんですか。ほんのちょっとにも見えるし、何とも言えないですけども。1人とか2人とそういう話ですか。</p>
竹内賢二 平成さくら支援学校校長	<p>「そう思わない」という割合ですけども、まず授業づくりのほうで10%です。人数で言いますと5名になります。それ</p>

	<p>と学校の支援体制につきましては、人数で言いますと3名、6%になります。また、自立と社会参加に向けた取組については、人数で言いますと3名で6%となっております。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>授業のほうは「そう思わない」はいないように見えますけれども。</p>
<p>竹内賢二 平成さくら支援学校校長</p>	<p>特別支援の支援体制について「そう思わない」が2名です。「どちらかといえばそう思わない」も含めて3名になります。また、自立と社会参加に向けた取組については「そう思わない」が1名で、「どちらかといえばそう思わない」が2名で合わせて3名です。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>分かりました。少数ですけれども、そういうまだニーズに合っていると感じていない方がいらっしゃるということですね。他にはありますか。</p>
<p>泉薫子 委員</p>	<p>さくら支援学校の就労率が非常に良いので、とても安心いたしました。つくるときにいろいろどういった作業をすることが就労につながるかというのを一生懸命考えた覚えがありますので、就労率が高いのは嬉しいです。</p> <p>それと内容的なものなんですけれども、つくりましたときに、ものづくりだけではなくてサービス業というのがあるのは画期的だなというふうに感じた覚えがあるんですが、今現在、実際就労されているのを見ますと、令和2年が、一般就労が増えておられるので、何らかの効果があるのかなというふうに見ているところなんですけれども、具体的にどんな作業が、どれも役に立つんでしょうけれども、どんなふうに見ていらっしゃるのかということと、あと市の職員というか、障がい者枠というのに1人ずつ入っていらっしゃるということですか、これは。非常にいいですね。市の職員で障がい者枠が満たされていないという、これも教育関係が満たされていないという報告もいただいていたので、学校の整備とかそういったところの就労も考えられるのかなというふうに思っていて、就労に対していろんな感想と意見があるんですけれども、教えていただければと思います。</p>
<p>竹内賢二 平成さくら支</p>	<p>今、就労に関しての取組の成果というところでご意見をいた</p>

<p>援学校校長</p>	<p>ありがとうございます。</p> <p>一般就労が令和元年度が6名、令和2年度が10名と増えておりますけれども、生徒の障がいの実態が学年によって違いますので、軽度の生徒さんが多い学年はどうしても一般就労の率が高く、そういったところへの就労の数が多くなるため、これが一概に毎年多くなるとは言えず、生徒の実態によってこの数は変わってくると思っております。</p> <p>ただ、生徒の自立や社会参加に向けてどんな作業内容がいいのかという点について、毎年検討を重ねており、サービス業というのが就労のニーズとしてあるというところで、本校でもサービスの作業学習を取り組んでおります。ものづくりと違ってサービスは形のないものですからとても取り組むのが難しいですけれども、職員が毎年研修を重ねて、他校の取り組んでいる様子も見学に行きながら中身の充実を図っているところです。</p> <p>また、教育政策課の環境整備については、毎年1名ずつ就労しておりますけれども、現場実習のときにも教育委員会に協力をさせていただき、そして就労に繋いでいただくということで、教育委員会のほうにも大変感謝しております。</p> <p>以上です。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>他にいかがですか。</p>
<p>小屋松徹彦 委員</p>	<p>私も所属しているんですけども、熊本県中小企業家同友会という経営者の勉強会の集まりがあるんですけども、今、860社ぐらいの団体です。ここに委員会がありまして、以前は障がい者雇用委員会というのがあった。今はもう少し内容を広げてダイバーシティ委員会というのをやっています。ここは過去2年ぐらい前からだと思いますが、支援学校とそれから経営者の懇談会というのを始めている。ここにはさくら支援学校からも参加されているのでしょうか。</p>
<p>竹内賢二 平成さくら支援学校校長 小屋松徹彦 委員</p>	<p>進路指導主事がそういった会には参加をしております。</p> <p>職場開拓の拡充という観点から進路指導主事が参加されているのかなと思いますけれども、実はこの同友会の会員企業で障がい者の方を雇用したということによって、職場の雰囲気が変わるんですね。要するにその方をどうやってみんなで支えるかという、そういう観点で社員さんが非常にまとまって協力的に</p>

	<p>なったということで、そういう方が入ったことによって職場が改善する、そういう非常にいい面があったんです。そういう成功体験があるんですが、今、この委員会の中でやっていることは確かに障がい者の方を受け入れるということもありますが、自分たちの勉強でもあるわけです、企業側から言わせると。そういう方々にとって自分たちはどういう職場であるべきなのかと、人間としてどうあるべきかとか、そういったことまで勉強できるような、そういう機会になっていますので、多分毎年懇談会はありますけれども、ここには指導主事だけではなくて、できれば一般の学校の先生方も参加していただいて、いろんな面から一緒に障がい者雇用を考えていく、そういう機会にしていただければと思います。</p>
出川聖尚子 委員	<p>先ほど平成さくら支援学校のご報告で、卒業生の進路が極めて高く、そして今も離職せずに就労しているとお聞きしたんですけれども、最近の若者の離職率が高い状況は、恐らく支援学校でも今後課題として出てくるものではないかなと思っています。</p> <p>5ページの成果と課題の一番下に卒業後のフォローアップの実施と書かれていますけれども、離職した卒業生に対してのフォローや、お勤めしているときのフォローなのか、具体的にはどういうことなのか、教えてください。</p>
竹内賢二 平成さくら支援学校校長	<p>就労後の、職場に定着するまでのフォローアップがとても大事であると考えております。そういった就労した生徒を支援していただく専門機関もございます。学校だけではなく、専門機関と連携した支援を考えておりますが、支援を必要とする人の数が多くて卒業後の最低3年間は学校で何とかフォローアップをしてもらえないかという要望も出ております。学校としましては心配な生徒については連絡を取ったり、昨年度は新型コロナの関係でなかなか職場の様子を直接見に行くことができませんでしたが、長期休業中に進路指導主事、または旧担任、旧3年部の職員が様子を見に行ったりしながら状況をしっかり確認し、事業所のほうでもジョブコーチのようなシステムも活用できますので、関係機関とも連携して卒業生の支援を取り組んでいきたいと考えております。</p>
出川聖尚子 委員	<p>ありがとうございます。</p>

遠藤洋路 教育長	誰か、あおばについて聞きたいことはありませんか。
苫野一徳 委員	あおばに特定ということではないんですが、先ほどの熊大と連携をして教員養成をという話がありましたけれども、その連携がどれくらい深く意義深く行われているのかの現状や課題や、あるいはさらなる要望等があればお聞かせいただけますでしょうか。
若杉敏郎 特別支援教育室長	<p>先ほど支援学校の職員、教員の育成、養成に関して質向上につきましては、熊大等との協力ということを説明させていただきました。具体的には2つありまして、1つは熊大附属支援学校のほうに実際、熊本市のほうから行って、その教育課程の中で実際そこの教育と一緒に職員として行うということは何年か継続してやらせていただいております。</p> <p>もう1つは、特別支援教育に携わる者に、今年度は2名ですがけれども、1年間の専攻科に派遣して学ぶという制度がございます。これは現在も行っておりますけれども、そういうことを取り組みながらやってきたんですけれども、開校しましたものですから、前段の附属の支援学校に行くということは今のところもうやっておりません。熊本市には今、知的の支援学校はあるんですけれども、支援学級の中には様々な障がいの子どもさんもおられまして、その障がいにおける専門性というのが特別支援教育の中では非常に大切なものですから、そういう部分をどのように職員に学んで、熊本市のニーズに伝えていくかということにつきましては、今後熊大の教育学部特別支援教育との連携等も含めてやっていかないといけないと思っており、課題意識として持っているということです。</p>
西山忠男 委員	あおばでは1人1台タブレットが配置されているということですが、どのように活用されているか簡単にご紹介いただけますか。
西正道 あおば支援学校校長	小中学校と同じようなかたちで授業でも使っております。今はコロナでなかなか学校の様子を見に来ていただけないものですから、学級通信に写真を多く入れて、それをロイロノートで各家庭に配ったりしています。中学部が修学旅行を5月から9月に延期にしましたので、行き先を調べたり、いろいろと活用

	<p>をさせていただいております。休校期間中もZ o o mで繋がったりいろいろなかたちでも使わせていただいております。とてもありがたく感じております。</p>
西山忠男 委員	<p>ありがとうございました。 コロナ禍での特別支援教育の難しさというのは何かございませうでしょうか。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>両方、ではまず西校長から。</p>
西正道 あおば支援学校校長	<p>まず、小学部の子どもさんの中でもやはり低学年は、マスク等ができませんので、特に給食の場面とかは一緒に食事も食べますので、配慮はしております。いろんなところから視察にも来ていただいたり、保護者の方にも直接見ていただきたりすることができない状況です。城東小、藤園中との交流もできないということで、今日、実は小学部の「お店屋さん」という単元で、各クラスでお店屋さんを出す授業でしたが、城東小学校の支援学級の子どもさんだけの参加でした。授業参観も30分、各3人の制限で授業を見ていただいたり、とても配慮がより必要だと感じておりまして、早くこの状況が終わりたいなど、終わって思い切りやりたいなどという気持ちでおります。</p>
竹内賢二 平成さくら支援学校校長	<p>やはりコロナ禍で一番気をつけているのが生徒の健康管理です。それについては毎日の家庭や学校での健康観察を十分に行うなど、コロナ対策ということでもかなり気を配ってやっているところです。また、学習活動でも作業学習など、どうしても集団で活動しますので、密にならないような場の構造化というところで工夫をしながら進めております。</p> <p>あと今一番調整が難しいと感じていますが、2年生、3年生で現場実習を取り組んでいく中で、コロナの状況で実習先のほうから今は受入れができないというところもあり、本来なら期間を2週間程度区切って一斉に現場実習を実施する計画ですけども、個別に時期をずらして実施するなどの調整あたりも大変苦労しながら行っているところです。</p> <p>それと先ほどの質問について補足で1つ説明をさせていただきます。先ほど小屋松委員から、職場開拓のために事業所との連絡会に進路指導主事が参加しておりますと説明しましたが、進路指導主事というのは本校の職員になりますので、本</p>

	<p>校の職員が実際に参加をしております。しかし、進路指導主事だけではなくて、他の職員も参加できるようにというところを考えていきたいと思います。ありがとうございました。</p> <p>以上です。</p>
若杉敏郎 特別支援教育室長	<p>特別支援学級の子どもたちに関するコロナの影響ということでも少し説明させていただければと思います。</p> <p>いろんな様々な子どもたちがおりますけれども、支援が必要な子どもたちの学びを考えると、どうしても直接的に学ぶとか、体験を通して学ぶということが非常に効果的な子どもさんが多くおりますけれども、ご存知のとおり、コロナというのはそこに配慮が必要な部分が多く現状としてありまして、その学ぶということがなかなか直接的だったり体験的だったりということが経験しづらいという状況があつて、そこに対して今、学校は工夫をしながら行っているという状況があります。</p> <p>一応補足をしておきます。以上です。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>他にありますか。</p> <p>では、時間もちょうど来ていますので、本件は以上といたします。</p>
〔閉会〕 遠藤洋路 教育長	<p>本日の日程は全て終了したので、令和3年6月の定例教育委員会会議を閉会いたします。</p>